

さくらがわ^し市の
“だからもの”

絵 近藤 亜希子

さくらがわ市^しの
“だからもの”

絵 近藤 亜希子



ひなちゃんとひろとくんは、ふたごちゃん。

さくらがわ市^しにすんでいます。

ある日^ひ、ふたりは公園^{こうえん}で

見たことのない男^{おとこ}の子^ことであいました。

「こんにちは。ぼく、けんと。

こんどこのまちに

ひっこしてくるかもしれないんだ」

「そうなの？ ぼくは、ひろと」

「わたしは、ひなよ」

3人^{にん とも}は友だちになって、

いっしょにあそぶことにしました。

すると、けん^いとくんが言いました。





「このまちのたからものって、なぁに？」

「え？ たからもの？」

「今、^{いま}ぼくがすんでいるまちには、^{おお}大きな^{えん ち}ゆう園地があるんだ。
それが、ぼくのまちのたからもの。このまちのたからものはなぁに？」

「うーん。^{えん ち}ゆう園地なんてないし…」

ふたりは、こまって^{かお み}顔を見あわせました。

「そうだ！ おじいちゃんとおばあちゃんに^き聞いてみよう」

「うちのおじいちゃんたちは、

さくらがわのことはなんでも^し知っているのよ」

「けんとくんもいっしょに^い行こうよ」

けんとくんが^{とう}お父さんたちに^き聞いてから、

3人^{にん}はいっしょに^{ある}歩きだしました。



「ここは、みどりがいっぱいあるね」
^{ある}歩きながら ^いけんとかんが言いました。

「みどり？」
「木^きや 山^{やま}に、田^たんぼに はたけ、それに草花^{くさばな}とか。
ぼくのすんでいるまちは、ビルばかりで、
こんなみどりや広^{ひろ}い野原^{の はら}なんてないからさ」

「ビルばかりなんて、なんかかっこいいね。ゆう園^{えん}地^ちもあるし」
ひろとかんは、ちょっとうらやましくなりました。

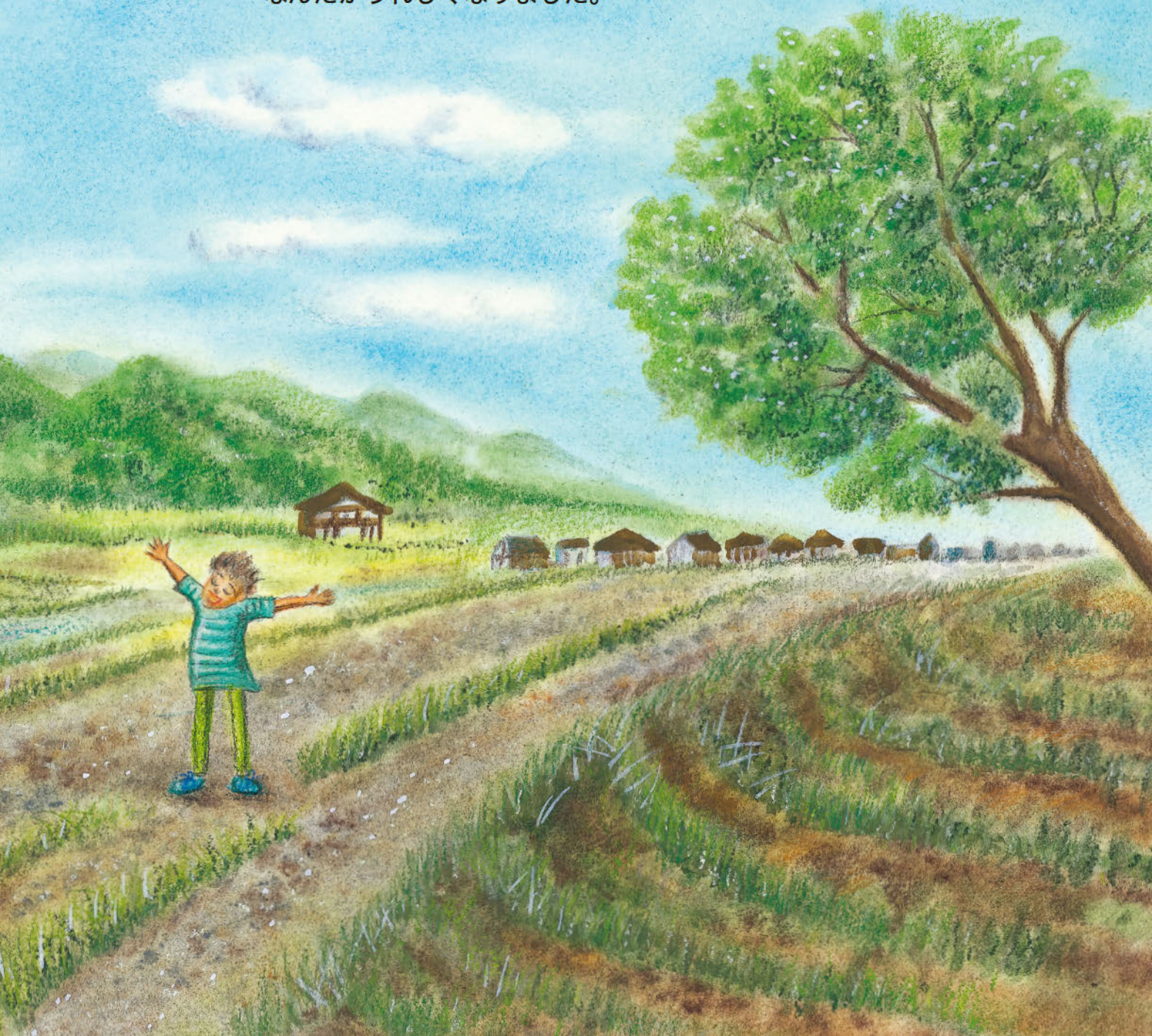


「ゆう^{えん}園^ち地^いなんて たま^いに行くだけだから、
あんまりかんけいないよ」

「そうなの？」

「公園^{こうえん}も広^{ひろ}くて楽^{たの}しいし、こんな^{おお}に大^{そら}きな空^みも見えて、
本^{ほん}当^{とう}に いいところだね」

けんとくん^いに言^いわれて、ひなちゃんとひろとくんは、
なんだかうれしくなりました。



「こんにちは。よく来たね！」

「さあさあ、みんな おやつをめしあがれ」

おじいちゃんとおばあちゃんは、
3人を大かんげい。

「おじいちゃん、けんとくんは、
こんど さくらがわに ひっこしてくるんだって」
ひなちゃんが言うと、おかしを食べていた
ひろとくんが、あわてて言いました。

「そうそう、おじいちゃん、
さくらがわのたからものってなあに？」

「たからもの？」
おじいちゃんが、聞きかえしました。
「うん、けんとくんのまちのたからものは、
ゆう園地なんだって」
「さくらがわにも、たからものはある？」
ひなちゃんも聞きました。





「さくらがわのたからものといえば、
まず、^{さと やま}里山のしぜんのゆたかさだろうな」
おじいちゃんは、^{はな}話しはじめました。
「^{さと やま}里山って？
^{やま}ふつうのお山とはちがうの？」
ひなちゃん^きが聞きました。
「むかしから、みんなのそばにあって、
^{だ たい せつ やま}くらしにもやく立つ大切な山を
^{さと やま}里山というんだ」



「むかしは^{やま}山で、^{つく}ごはんを作るためのたきぎをひろったり、
さんさいをつんだり、^{やま}山のさちをたくさんいただいたものよ」
3人^{にん}は、はじめて^き聞く話^{はなし}に、目^めをまるくしています。
「^こ子どものころは、さわでカニをとったり、^{やま}山でいっぱいあそんだものさ」
「お花^{はな}でかんむり^{つく}を作ったりして楽しかったわ」とおばあちゃん。
「^{たの}たのしいな」とおじいちゃん。



^{はる}「春のさくら、^{なつ}夏や^{あき}秋の^の野山、
^{ふゆ}冬に^{はくちよう}白鳥がたくさんとんでくる^{いけ}池。
 ひるとや^{だい}ひなの大すきな
 キャンプ^{じよう}場やりんりんロード…」



「さくらがわいそべいなむらじんじゃに、
^{あま}雨びきかんのんのあじさいまつり…、
 まかべのひなまつりもすてきですよ」
 「みんな たからものだな」
 とおじいちゃん。

「でも、おじいちゃん、1番は？」

ひろとくんが聞きました。

「1番か……」

おじいちゃんが言うと、

おばあちゃんがすぐに

「山桜！」と大きい声を出し

「常よりも春辺になれば桜川

波の花こそ間なくよすらめ」

と言いました。

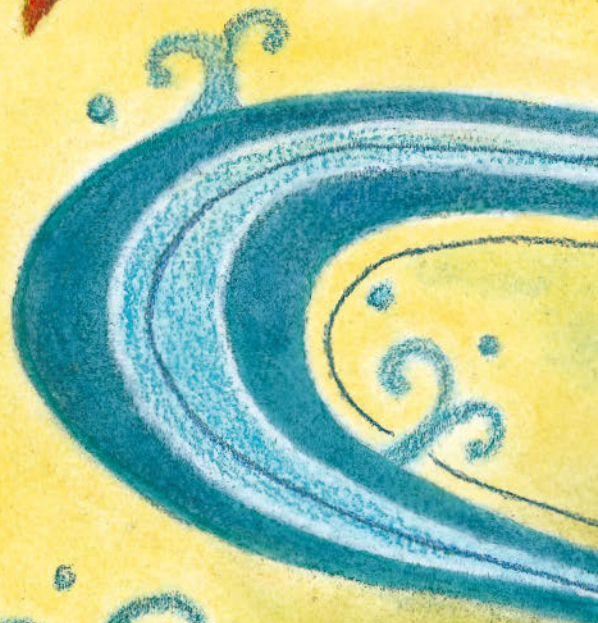
「なあに？」

「さくらがわの山桜の

うつくしさをうたった千年もまえのうたよ」

「むかしから、さくらがわの山桜は

日本じゅうでゆうめいだったんだ」





「さくらのせんぞとも^い言われていて、
さくらがわには、“てんねんきねんぶつ”という
^{にほん}日本のたからものの^{やまざくら}山桜もあるのよ」

「やっぱりさくらがわだけの
^{ばん}1番のたからものは^{やまざくら}山桜だな！」

おじいちゃんが、きっぱりと^い言いました。

やまざくら

「山桜って、ふつうのさくらとちがうんですか？」

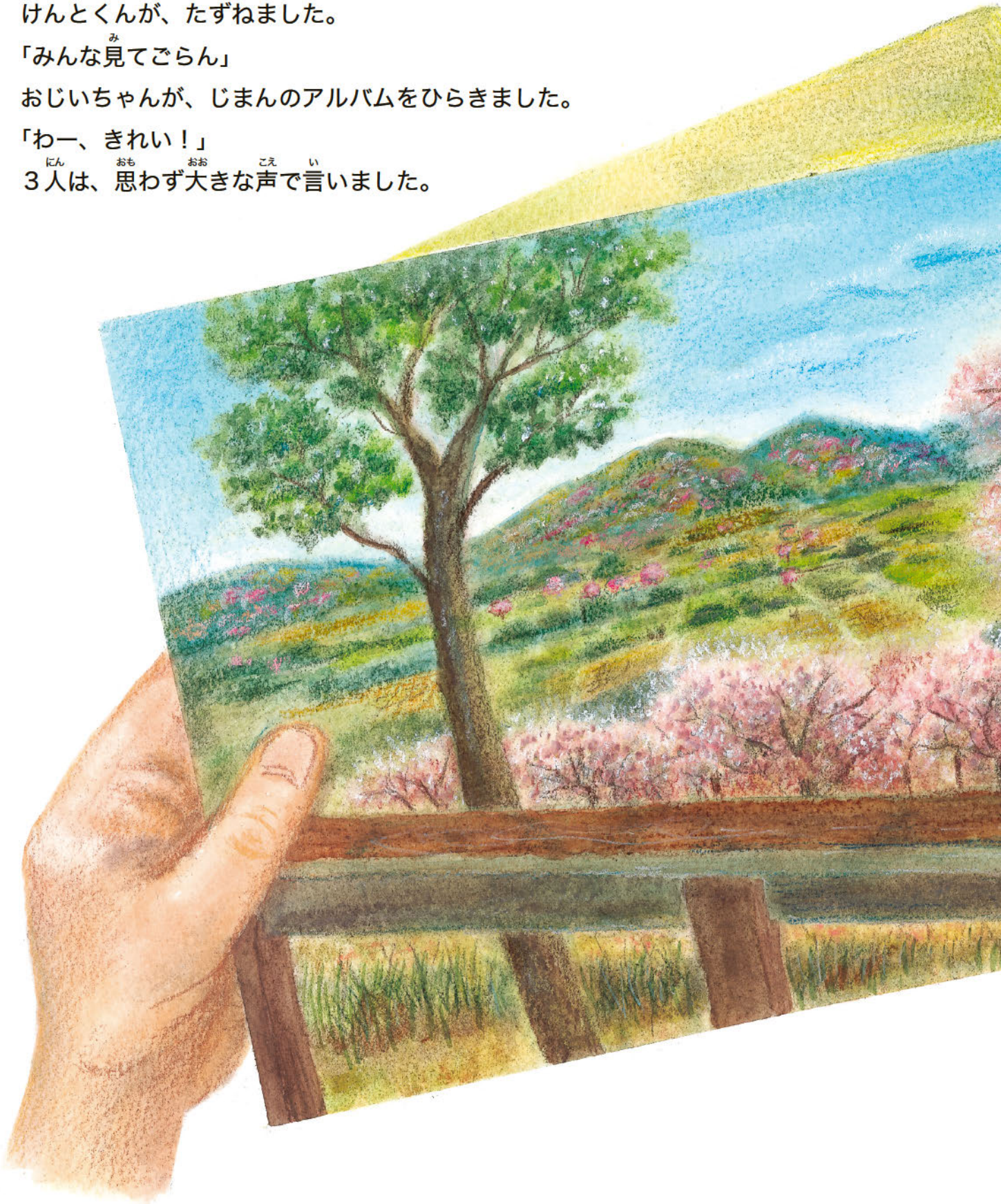
けんとくんが、たずねました。

「みんな^み見てごらん」

おじいちゃんが、じまんのアルバムをひらきました。

「わー、きれい！」

3人は、^{にん} ^{おも} ^{おお} ^{こえ} ^い思わず大きな声で言いました。



「これは てんぼう^{だい}台からとったしゃしんだよ」

「さくらがわの山桜^{やまざくら}は、1本の木^{いっぼん}だけでもきれいだけれど

山^{やま}にさいているけしきもとってもすばらしいの」

しゃしん^みを見ながらおばあちゃん^いも言いました。

「春^{はる}になると、たくさんの山桜^{やまざくら}で山^{やま}の色^{いろ}がかわるのよ」







「それから、このしゃしんを見て。
公園の山桜とは、花の色や形が少しずつ ちがうのよ」
3人はしゃしんをのぞきこみました。
「本当だ。お花がまとまっていたり、はなれていたり」
「よく見ると、それぞれがちがうんだね」
「こっちは、はっぱの色が お花みたいだろう？
花やはっぱの色も少しずつかわったりするんだ」
とおじいちゃん。
「山桜は、人間みたいに 1本1本がちがうの」

「わたしたちひとりひとりが ちがうように」
おばあちゃんが、ことばをつづけます。
「ひとつひとつのちがう^{やまざくら}山桜が、ほかの^き木の^{いろ}色や
そのときどきの^{はな}花の^{いろ}色や^{かたち}形とあわさって、
さくらがわだけの^{いろ}きれいな色をつくりあげるの」
^{やま}「山ぜんたいが、^{おお}ちからをあわせるんだ！」
けんとかんが^{おお}大きくなずくと、
おじいちゃんたちもうなずきます。





「そう。だから、よく山^{やま}のていれをして、
ほかの木^きも山桜^{やまざくら}も
どちらも大切^{たいせつ}にしないといけないんだよ」
「今^{いま}もきれいなのは、山桜^{やまざくら}を
だいじに思^{おも}って、山^{やま}のおせわをしてくれる
人^{ひと}たちがいるからなのよ」

「きれいな山桜^{やまざくら}、見^みてみたいなあ」
けん^いとくんのことばに、ひろとくんが言^いいました。
「春^{はる}になったら、いっしょに山桜^{やまざくら}を見^みに行^いこう。
あと、いっぱいあそぼうね！」
「うん。ありがとう！」
ぼく、ひっこしてくるのがたの^{たの}しみになったよ」

その夜、ひな^{よる}ちゃんとひろ^みとくんは、ゆめを見ました。

ふたりは、おうちのにわの

やまざくら^きの木のま^たえに立っていました。

かえ
帰ったはずのけん^{かえ}とくんや

おじいちゃん、おばあちゃんもいっしょです。



やがてみんなは、なかよく
て
手をつなぎました。

「さあ、行くぞ」と
おじいちゃんがいうと、

みんなの体は

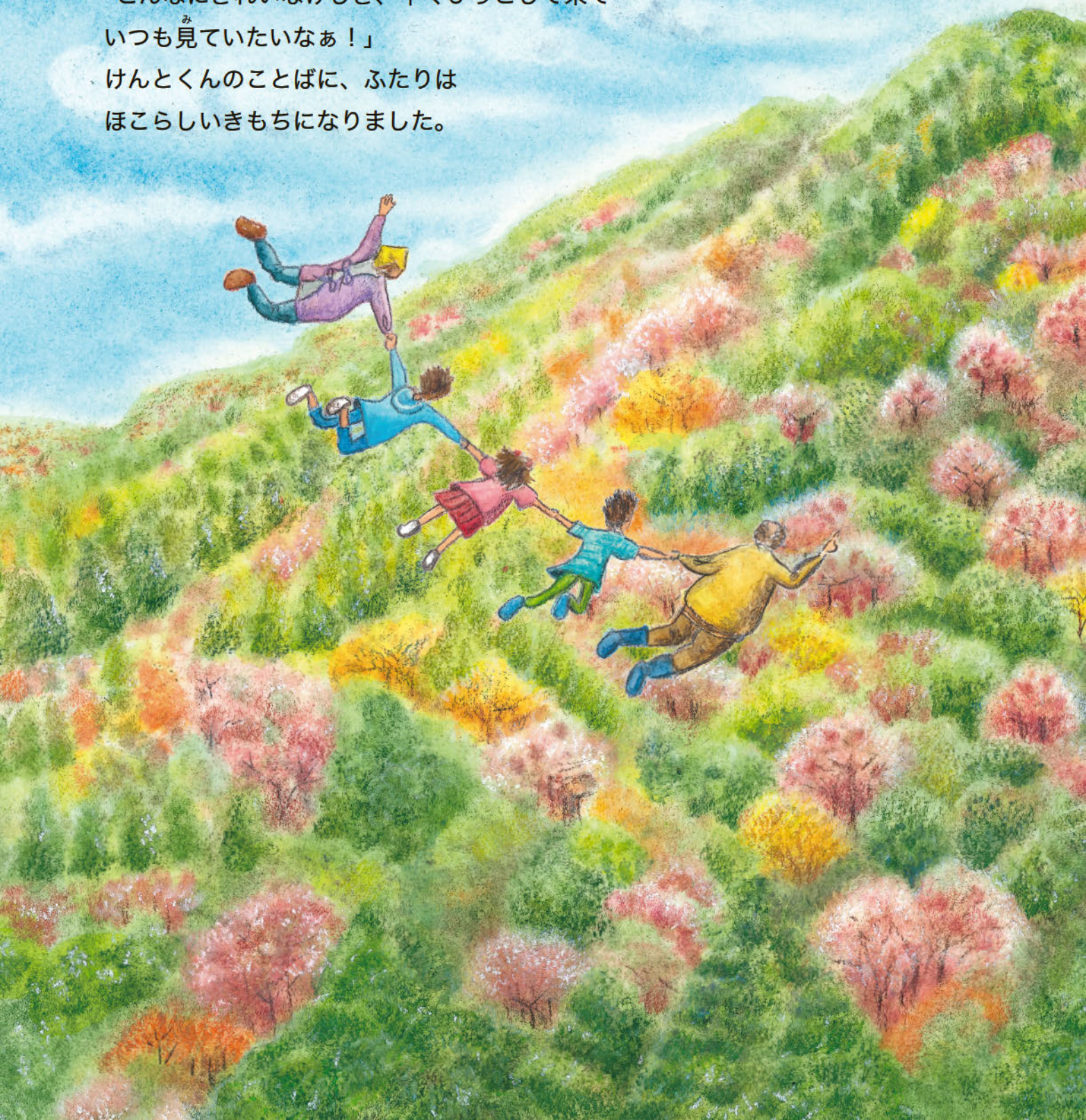
ふわりと空中にうかび、
だんだんと空へと

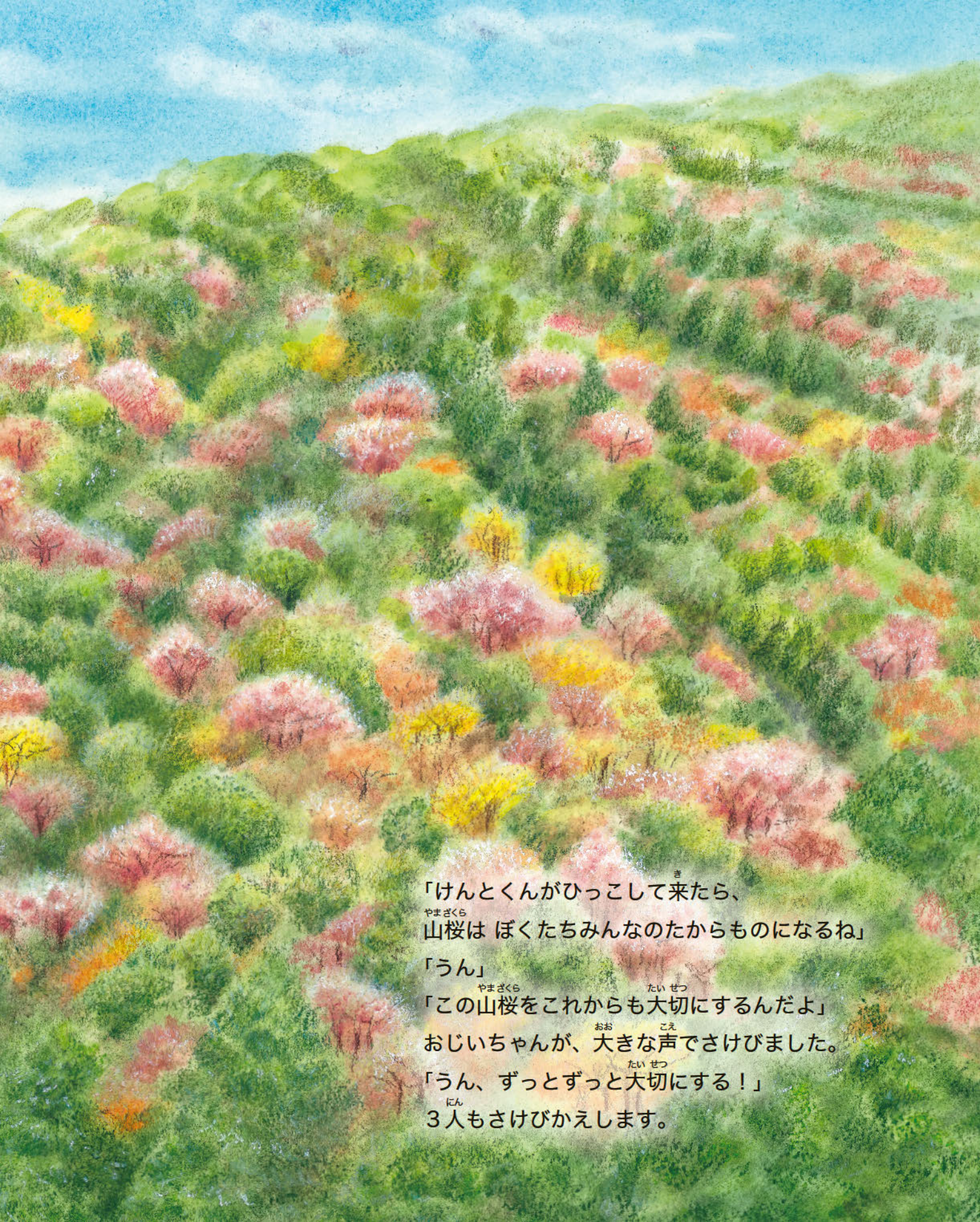
まいあがって行きました。



した ひろ はる
下に広がるのは、春のさくらがわの
うつくしい山桜です。
やまざくら

「こんなにきれいなけしき、早くひっこして来て
いつも見ていたいなあ！」
けんとかんのことばに、ふたりは
ほこらしいきもちになりました。





「けんとくんがひっこして来たら、
やまざくら山桜は ぼくたちみんなのたからものになるね」

「うん」
やまざくら「この山桜をこれからも大切にたい せつするんだよ」

おじいちゃんが、おお大きなこえ声でさけびました。

「うん、ずっとずっと大切にたい せつする！」

にん3人もさけびかえます。

そのころ、そのことばにへんじをするかのように
ゆめの中のおうちに^{なか}わでは、
^{やまざくら}山桜の花が、^{はな}しずかにひらいていました。



fin

「西の吉野、東の桜川」と、吉野山(奈良県)と並び称されるほどの桜の名所として知られた桜川市。山桜は、桜川市の人々と古くから深いつながりをもつ、ふるさとの宝ものです。山桜がなぜ宝ものなのかを知ることは、これまでのわたしたちの暮らしを振り返り、同時にこれからの暮らしのあり方を考えるよいきっかけになることでしょう。絵本の終わりにあたって、桜川市の歴史にあらわれる山桜の姿、そして山桜を守り、育てるさまざまな取り組みを紹介します。

STUDY

古くから親しまれてきた桜川市の山桜 ～歴史にあらわれる山桜～

時代	世紀	西暦	HISTORY
古墳			
飛鳥	7	600	
奈良	8	700	● 役小角(えんの おづぬ)が吉野山の桜樹(おうじゅ)に蔵王権現像を彫る 『古事記』木花之佐久夜毘売(このはなのさくやひめ) 『日本書紀』木花開耶姫(このはなさくやひめ)
		800	● 『万葉集』には、桜より梅を詠んだ歌が多い ● 嵯峨天皇が日本で最初の花見「花宴の節(かえんのせち)」を開く(『日本後紀』)
平安	9	900	● 京都御所「左近の梅」が「左近の桜」に ● 『古今和歌集』に吉野山の桜が詠まれる
	10	1000	● 紀貫之が桜川の桜を詠む(『後撰和歌集』) —————
	11	1100	平安時代に、桜の和歌が梅の和歌の3倍に(花見=桜)

紀貫之(きの つらゆき)
が詠んだ和歌
『平安時代の山桜』

平安時代の歌人、紀貫之(872～945)は、「常よりも 春辺になれば 桜川 波の花こそ 間なく 寄すらめ」(『後撰和歌集』)と和歌を詠みました。「春になると、桜の花びらが波のように寄せてすき間なく川面をおおうほどになることだろう」と桜川の山桜の素晴らしさを称えています。



謡曲「桜川」の舞台 《室町時代の山桜》

幽玄能(ゆうげんのう)を大成した世阿弥元清(ぜあみ もときよ、1363～1443)の作品。日向国(ひゅうがのくに、現在の宮崎県)で生き別れた母と子が、はるか遠くの常陸国(現在の茨城県)桜川で再会する物語で、愛情深い母子の姿がこの地に咲き、また川面に散る美しい桜を背景に描かれています。

衰退の危機から 国指定天然記念物へ 《昭和時代の山桜》

大正13年(1924)に国の指定を受けた名勝「桜川」は、しばらくの間は大勢の花見客でにぎわいましたが、染井吉野が花見の主流になったことなどから花見客が目に見えて減少していきました。同時にサクラの木も衰弱したことなどから、更なる保護を目的として、昭和49年(1974)に名勝指定地内のサクラが天然記念物「桜川のサクラ」として、再度国の指定を受けました。



磯部桜川公園内名勝指定地周辺



天然記念物指定記念碑

多様性が魅力を生む山桜 ～植物としての山桜～

染井吉野は栽培品種、 桜川の山桜は自生種

染井吉野が数百種もあるといわれる栽培品種(人間が栽培したサクラ)の1つであるのに対し、ヤマザクラは日本に自生する9種類しかない野生のサクラの1つです。桜川の山桜は花が淡紅色を帯びたり、匂いのあるものが多く見られるのが特徴となっています。

染井吉野はクローン、 山桜はすべて異なる遺伝子

種から育てるのではなく接ぎ木で増やす染井吉野は、同じ遺伝子構造をもつクローンです。それに対して、自生する山桜は1本だけでは受粉できないため、子孫を残すためには別の木が必要です。この点は人間と同じで、すべての木が異なる遺伝子をもっています。

三好學博士が命名した、桜川市の山桜

東京帝国大学(現在の東京大学)教授であり、「桜博士」とも呼ばれる植物学者の三好學氏(1862～1939)が明治45年(1912)に桜川の桜の調査に訪れました。その際とりわけ特

徴的で貴重な16種に名前をつけ、その中の11種を『櫻花図譜』という著書で紹介しています。この時の調査が大正13年(1924)の名勝指定につながっています。



桜川句(さくらがわにおい)



樺句(かばにおい)



初重櫻(はつがさねざくら)



初見櫻(はつみざくら)



大和櫻(やまとざくら)



源氏櫻(げんじざくら)



白雲櫻(しらくもざくら)



薄毛櫻(うすげざくら)



青櫻(あおざくら)



青毛櫻(あおげざくら)



梅鉢櫻(うめばちざくら)

【参考文献】『櫻花図譜』三好 学

多様性をもつ山桜だからこそ楽しみ方

1本1本の違いをつぶさに見比べる

1本1本の木が異なる遺伝子をもつ山桜は、花の大きさ、花の形、花の色、芽(葉芽)の色などがそれぞれ異なり、多様性に富んでいます。さまざまな姿をつぶさに見比べることも楽しみ方の1つです。

離れて里山全体を眺める

里山に咲く山桜の景色は、花だけでなく新芽の色が山を彩りパッチワークのような趣です。麓の田畑などを含めて遠目から里山全体を眺め、春の気分をゆっくり味わうのも山桜ならではの花見です。

日をおいて、変化する景色を楽しむ

山桜が開花するタイミングは1本ごとに違い、桜川では最初の開花から最後の葉桜まで約1か月近くの差があります。早春から新緑を迎えるまで、日をおいて変化する景色を幾たびも楽しむことができます。

注:「ヤマザクラ」と「山桜」の表記の違いについて

本来、「ヤマザクラ」と表記する際は種としてのヤマザクラを指し、「山桜」と表記する際はカスミザクラを含みます。この絵本では、桜川に自生する「カスミザクラ(野生種の1つ)」を含めて一部表記しています。

山桜を守り、育てる ～市民が実践するさまざまな山桜保全活動～

忘れられていた山桜の復活に向けて活動を始めた「サクラサクリプロジェクト」

名勝指定地周辺を造成した磯部桜川公園が昭和61年(1986)に完成しましたが、近隣に染井吉野のお花見スポットができたり、園内の山桜が衰弱したこともあり、地元の人たちからも忘れられた存在になってしまいました。

そうした姿を見て、地元の貴重な地域資源の魅力を伝えようと、平成17年(2005)に当時の岩瀬町商工会青年部の有志を

中心として「サクラサクリプロジェクト」が設立されました。設立の目的は、桜川の山桜の素晴らしさをより多くの人々に伝えて地域の誇りにしようというもので、磯部地区にある名勝・天然記念物のサクラだけでなく、現在は絶景のお花見スポットとなっている高峯も、地元平沢地区の人々と協力して整備を行いました。

「サクラサクリプロジェクト」の多彩な活動

サクラサクリプロジェクトの活動は、多くの市民との協力の輪を広げながら多岐にわたっています。

● 磯部桜川公園での山桜早朝観察

山桜の開花の季節になると、毎日早朝に磯部桜川公園で観察を行っています。サクラの状態や花の特徴を記録したり、写真を撮ったりして、知識を蓄えながら山桜への親しみを深めます。

● 市内小学校の総合学習で出前授業

市内の小学校に出かけて、山桜の知識だけでなく、種拾いから苗木の育成を行うなど、サクラと触れ合う授業を行っています。

● 苗木の育成・植樹

山桜を守り、未来に伝えるために、苗木の育成や植樹を行っています。

● 観光客向けのガイドボランティア

市外の人たちにも山桜の素晴らしさを知ってもらおうと、櫻川磯部稲村神社や磯部桜川公園を中心に、観光客向けのガイドをボランティアで行っています。

● 春には毎日、開花情報を発信

山桜の開花時期が近づくと、毎朝開花の様子を直接見て確かめ、HPやSNSで開花情報を発信しています。

桜川の山桜を未来につなごう ～サクラサクリプロジェクトからのメッセージ～

桜川市の山桜は、市内全域に自生しており、55万本の山桜の里として市民の暮らしに潤いを与えています。特に、磯部地区は国の指定を受けており、平安期より多くの諸氏の努力により守られてきましたが、国の財産とも言える歴史的資源の価値や保護意識が時代と共に薄れてきています。この絵本が「桜川の桜」を後世へ伝えていくために活用されることを期待し、ご協力いただいた関係諸氏に感謝申し上げます。



メンバーによる観光客向けガイド(2点共)



公式HP



Facebook

サクラサクリプロジェクトが第10回地域再生大賞優秀賞を受賞

「地域再生大賞」は、地域づくりに取り組む団体を表彰するために、地方新聞と共同通信が平成22年(2010)に設けた賞です。サクラサクリプロジェクトは、その地道な取り組みが高く評価され、令和2年(2020)に優秀賞を受賞しました。

10回 地域再生



「桜川市ヤマザクラ保全活用計画」～市が推進する保全活用計画～

山桜をシンボルに掲げた まちづくりの推進《計画策定の背景》

現在、山々に55万本の山桜が自生するともいわれる桜川は、古くから日本を代表する山桜の里として歩んできました。しかし、近年になって名勝指定地内のサクラの樹勢は著しく衰え、生活様式の変化や高齢化などにより山桜が自生する里山の維持・管理も困難になってきました。こうしたことから、貴重な地域資源であるサクラや里山を見直し、その価値を高め広く伝えることで、地域らしさを活かした暮らしづくりに繋げるため、「桜川市ヤマザクラ保全活用計画」を平成31年(2019)に策定し、山桜をシンボルに掲げたまちづくりを進めています。

桜川らしい真に持続可能な 暮らしづくりに向けて《計画の目的》

歴史ある名勝地や天然記念物のサクラの再生と、山桜の自生する里山の保全活動を通し、日本を代表する山桜の里に相応しい景観と自然環境を目指すことで、地域の活性化と、市民の郷土に対する誇りと愛着を育み、桜川らしい真に持続可能な暮らしづくりに繋げることを目的とします。

日本を代表するヤマザクラの里の再生《基本理念》

地域資源である里山やヤマザクラを再生し、その価値を高め、広く伝えることで、
「日本一のヤマザクラの里」の景観と自然環境を創出する

3つの柱で、地域の課題を解決《基本方針》

「名勝・天然記念物のサクラの保全」、「里山の保全」、「人材の育成」の3つを柱に、山桜と自然環境の保全を通して地域の課題解決につなげ、持続可能な桜川の暮らしを実現する。

1 名勝・天然記念物の サクラの保全

名勝・天然記念物のサクラがいきいきと生育する、景勝地に相応しい景観が取り戻され、桜川のサクラの価値や認知度が向上し、市民の理解と愛着が育まれています。

2 里山の保全

里山の山桜の景観が市民の誇りとなり、里山の環境に対する関心の高まりと、保全活用の動きが広がることで、桜川らしい美しい里山の景観や自然環境が守られています。

3 人材の育成

「日本一のヤマザクラの里」のまちづくりが世代を問わず広く市民に浸透し、市民や団体、企業、行政、学校などさまざまな主体が、さまざまな形で保全活用に関わり、緩やかなネットワークが出来上がっています。



門毛地区雨巻山の山桜



平沢地区高峰の山桜



真壁高校の生徒による樹木調査



小学生による種拾い
(山桜の花咲く里事業)



2021年3月

企画・発行 桜川市
監 修 桜川市山桜保全啓発絵本制作委員会

桜川市役所 <http://www.city.sakuragawa.lg.jp/>
大和庁舎 〒309-1293 茨城県桜川市羽田1023番地
TEL (0296) 58-5111 (代表) FAX (0296) 58-5082

企画協力・制作 凸版印刷株式会社
特別協力 サクラサクリプロジェクト
絵 近藤亜希子
編集・文 オフィスhana、律
ブックデザイン 福本敬久
資料提供 石匠の見世蔵組合
写真提供 共同通信社 (P.28 受賞写真)
印刷・製本 凸版印刷株式会社

お問い合わせ 桜川市総合戦略部ヤマザクラ課

©2021 CITY OF SAKURAGAWA. ALL RIGHTS RESERVED.
本書の内容、写真などの無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

